

原 著

異形の図像学

—イタリア・ラヴェンナの怪物像をめぐって—

松 平 俊 久*

要 旨

本稿は、イタリア・ラヴェンナの怪物像に関する図像学的一考察である。1512年3月に誕生したといわれるこの怪物は、1ヶ月後におこなわれるフランス軍のラヴェンナ侵略を予兆した存在として、人口に膾炙していた。その証左として、ラヴェンナの怪物を記述した歴史資料や図版が数多く残っている。それらによれば、ラヴェンナの怪物の姿は両性具有の特徴をそなえ、腕の代わりに翼が生えていて、膝頭に目がついているなど、あまりに奇怪である。なかでも注目すべき特徴は、胸部ないし腹部に刻まれた刻印といえる。むろん、この怪物が実際に誕生したはずはない。

本論考の目的は、想像上の存在であるラヴェンナの怪物がどのように語られていたのかを歴史資料から精査し、またその像にどのような意味が付与されていたのかを図像学的分析によって明らかにすることにある。

怪物は語源からも分かるように、古来より「前兆」や「神意」のあらわれとして理解されてきた。その限りにおいて、ラヴェンナのそれは伝統的な怪物であることに間違いない。だが図像学的分析によって、以下のような極めて希有な特徴があることも明らかとなった。

ラヴェンナの怪物像（＝造形表現）には2つのタイプがあり、両タイプの各部位を詳細にみていくと、そこにはキリスト教教義における「7つの大罪」という象徴的意味があらわされていたのである。また、最大の特徴である刻印は「イエス・キリスト」を意味しているのだった。すなわち、ラヴェンナの怪物像は罪の象徴的集合体でありながら、イエス・キリストそのものをあらわしているということである。

換言すれば、ラヴェンナの怪物には凶兆という伝統的な理解がある一方で、その像は聖と俗という両義性が付与されることで成立している、まさに「相反するものが一致した」二元論的イメージなのだ。

はじめに —「神は細部に宿りたまう」

イタリア中北部のエミリーア・ロマンニャ州にある小都市、ラヴェンナ。アドリア海に面したこの町は、5世紀初頭、西ローマ帝国の首都

として繁栄し、今日ネオニアーノ洗礼堂（5世紀）をはじめとした、見目麗しいモザイク装飾で有名な観光地となっている^[1]。約500年前の1512年3月、ここである奇妙な出来事が起こった。《怪物》が生まれたのである——。

*早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程

それは「ラヴェンナの怪物」と呼ばれた。むしろ、この怪物が実際に生まれたはずがない。だがその奇態については、個人の日記や驚異譚を集成した書物から、はては博物誌や医学書などといった「学術」書にまで、ときに図版入りで紹介されている。このことから分かるように、ラヴェンナの怪物は本国イタリアだけでなく、16世紀のヨーロッパ各地、とくにフランスとドイツにおいて広く人口に膾炙した存在であった。

まるで錬金術の世界から飛び出てきたような、あまりに奇怪な異貌については後述するが、ラヴェンナの怪物も典型的な怪物像に漏れず、各部位はさまざまな生物的要素からなっている。ここで想起されるのが、ドイツの美術史家アビ・ヴァールブルク Aby Warburg (1866-1929) が口癖のようにいつていた「神は細部に宿りたまう」という言葉である。これは美術のいかなる細部にも、必ず何らかのメッセージが込められているという彼特有のアフォーリズムであり、そうした細部を読み解くためには、あらゆる歴史資料からのアプローチが必要だともヴァールブルクは説く。

本論考では、このヴァールブルクの発想を念頭に置きつつ、ラヴェンナの怪物像の細部にこだわったアプローチを試みたい。すなわち、このラヴェンナの怪物が実際に誕生したものとしてどのように語られていたのかということを経典資料から精査し、またその異形なる姿にいかなる意味が付与されていたのかを解説する——。以上が本論考の目的となる。そのための具体的な方法論として、筆者は図像学的分析をできるかぎり詳細におこなっていく。この作業によって、一見怪奇性を醸し出すために組み合わせられたかのように思えるラヴェンナの怪物が、より大きなメッセージ性を帯びたものとして立ち上がってくるのではないだろうか。

まずはラヴェンナの怪物について語る前に、16世紀初頭のイタリア情勢を簡単にみていくことにしたい。なぜならそれは、怪物誕生と結びついているとされているからである。

1. ラヴェンナを見舞った災厄

——16世紀のイタリア情勢から

16世紀初頭、イタリアは不穏な空気に覆われていた。1509年5月14日のアニャネッロの戦いで、フランス軍がヴェネツィア軍を破り、北イタリアを制圧したことを受けて、時の教皇ユリウス2世（在位1503-13）がフランスに対する態度を変化させたのである。このときから、すでにラヴェンナの運命は決まっていたのかもしれない。

2年後の10月4日、ユリウス2世とアラゴン王、さらにヴェネツィアによる対仏大同盟（神聖同盟）が成立した一方で、フランス王ルイ12世（在位1498-1515）は同年12月13日にピサ公会議を開催、ユリウス2世の弾圧に乗り出した。

じつのところ、イタリアとフランスの対立の火種は、ルイ12世の一代前、シャルル8世（在位1483-98）のときから燐っていた。彼は1494年9月、方陣を組んだスイス歩兵と驚異的な砲兵とをともなう、ほとんど抵抗らしい抵抗も受けずにイタリア半島に侵攻したのである^[2]。それはときに「冒険的侵略」と呼ばれるほど、気まぐれで、利己的なものだった。結局、シャルル8世のイタリア遠征は短期間のうちに終わったのだが、これによりイタリアはそれまでの秩序を崩壊させることになる。たとえば、すでに失脚していたナポリの諸侯がふたたび台頭したり、暗殺をおこなって公位に就く者があらわれるなど、さまざまな混乱がイタリア中を席卷したのだ。最後には、フィレンツェが混乱に乗じてメディチ家を追放し、共和政を復活させてしまうのである。

前述した対仏大同盟はユリウス2世が提唱したのだが、ここにはアニャネッロの戦いでの敗北以前におこなわれた、シャルル8世によるイタリア侵攻という悪夢を拭き切れていないという事情があった。いずれにせよ、ユリウス2世とルイ12世の対立は、対仏大同盟によって決定的となったのである。

そして、1512年4月12日。両者の対立関係は最悪の結果をもたらす。復活祭の朝、同盟軍の補給という重要な拠点を担っていたラヴェンナを陥落させるため、侵攻したフランス軍とそれを死守しようとする同盟軍が同地で激突したのだ。世にいう「ラヴェンナの会戦」である^[3]。

戦いそのものはフランス軍の辛勝で終わった。しかし、ラヴェンナの悲劇はまだ終わってはいなかった。ラヴェンナの人々は降伏を申し出るため、フランス軍宿营地へと人を派遣したが、その交渉中、ラヴェンナの城壁の守りがおろそかになったことを見計らって、一部のドイツ兵とガスコーニュ兵が砲撃で破壊された城壁から市内に侵入し、至る所に火を放ち、残忍な大略奪をおこなったのである^[4]。戦場となった地のつねとして、ラヴェンナの町にもまた、「勝者」による蹂躪が待っていたのだ。これにより物価が高騰し、さらに人々の生活を圧迫することにもなったという。そんな血生臭い惨状が繰り返られる約1ヶ月前、まるでこの災厄を予兆するかのように生を受けたものがいた——。それこそ、ラヴェンナの怪物である。

2. ラヴェンナの怪物とはなにか

——その報告例と解釈

フィレンツェの薬剤師ルカ・ランドウッチ(1436?–1516)の日記は、当時を知る上で貴重な資料であるが、その1511年(1512年の誤り)3月11日の記述にはラヴェンナの怪物について次のようにある。

われわれはラヴェンナにとある怪物が生まれたと耳にしたが、ここにそれを描いたものが送られてきた。それによれば、頭には剣のようにまっすぐな1本の角、腕の代わりにコウモリのような2つの翼、そして胸の上部には片側にフィオ(Y字の印)、他方には十字の印、腰の部分には2匹の蛇、両性の生殖器、右の膝にはひとつの目があり、左の足は鷲の

ようだ。私は彩色されたものを見たが、フィレンツェではだれもが望めばこれを見ることができた^[5]。(括弧内引用者)

グラウリ(Graouilli)というドラゴンの登場する祝祭がおこなわれていることで有名な、フランス北部メッスの羅紗商人フィリップ・ド・ヴィニユルPhilippe de Vigneulles(1471–1527/8)は、全4巻からなる浩瀚な著作『年代記』*La Chronique*(メッス、16世紀初頭)を著した。その最終巻におけるラヴェンナの怪物描写は、ランドウッチのそれとともに最も初期の記述であるため、重要といわれる。彼は怪物誕生の正確な日時は知らないと述べてながらも、その出自については、所属不明の修道士と修道女による禁断の愛欲のはてだという噂を聞いたとし、身体的異形性については以下のように詳細な記述を残している。

頭は平たく大きいし、口と鼻と目と耳はまるでコウモリのそれらのような形だったが、ただ口だけはもっと裂けて、口角のところが肉厚になっていた。額に角が1本まっすぐに伸びていた。腕がなく、その代わりにコウモリのような翼を生やしていた。胸のところにはアルファベットのi、x、vの3文字が印され、腹にはやや左寄りに燃え上がる焔が2つ、3つかたどられてあったし、その左部分には同じく三日月もかたどられていた。生殖器は両性を具えて、下腹部に犬の一物のように尖った生殖器がまっすぐに屹立しており、その下に女性器があった。右の脚は普通の人間のものだったが、足に指がなくて一様になっていた。驚いたことに、その脚の膝頭に目がついていて、それは頭にある目と同じようにはつきりともものを見ることができたのである。一方、左の脚は魚の尾のように鱗で一面覆われていて、足は悪魔か大蛇(ドラゴン)の足そのものだった^[6]。

このラヴェンナの怪物誕生のニュースは、ただちに教皇ユリウス2世へと絵入りで伝えられ、ローマからヨーロッパ各地へと伝播していった。実際フランスでも、ヴァランスで印刷された、フランソワ・イヴォワFrançois Yvoy（生没年不詳）という人物による冊子『1512年に生まれた怪物の意味による世界3国への警告』が1513



【図版1】 ラヴェンナの怪物図。イヴォワ『1512年に生まれた怪物の意味による世界3国への警告』（ヴァランス、1513年）より。

年9月18日に出回っている^[7]【図版1】。

その後、ラヴェンナの怪物の存在は学識者によって取り上げられることになるのだが、それがはじめてなされたのは、1554年にチューリヒで出版された、スイスの医師ヤコブ・ルエフJacob Rueff（1500–58）の『人間の受胎と発生』*De Conceptu et Generatione Hominis*においてであるという^[8]。これは医学的見地から、人間の受胎および発生について論じたもので、そのなかでラヴェンナの怪物は異常出産の事例として触れられている。

ラヴェンナの怪物の事例は、驚異譚を集めた著作や「学術」書で矢継ぎばやに紹介され、その動きはむしろイタリア国外で盛んだったといえる。たとえば、アルザス出身の人文主義者コンラート・リュコステネスConrad Lycosthenes（1518–61）は、著書『奇異ならびに前兆の年代記』*Prodigiorum ac Ostentorum Chronicon*（バーゼル、1557年）のなかで、ラヴェンナの怪物を図版入りで紹介しているのである^[9]【図版2】。また、1567年にパリで上梓された『驚異の歴史』*Histoires Prodigeuses*において、ときにフランスのリュコステネスと称されるピエール・ボエスチュオPierre Boistuau（1517?–66）は、ランドウッチ同様、異形なる怪物の腹部にギリシア式のYの文字と十



【図版2】 ラヴェンナの怪物図。リュコステネス『奇異ならびに前兆の年代記』（バーゼル、1557年）より。ここでは2つの異なる姿で描かれている。



【図版3】 ラヴェンナの怪物図。ボエスチュオ『驚異の歴史』（パリ、1567年）より。

字印が刻まれていたと記している【図版3】。

同じフランスの高名な外科医アンブロワーズ・パレ（1517–90）は、1573年にパリで『怪物と驚異』を出版したが、この書は前半が医学的見地からの怪物論で、後半は当時「未開」の地に棲むとされた怪物たちや驚異譚などを取り上げた内容となっている。その著作の「神の怒りの事例」という章の末尾で、パレはラヴェンナの怪物を次のように紹介しているのだ。

教皇ユリウス2世がイタリアで数多くの不幸を引き起こしたとき、また彼がルイ12世に対して戦争を起こしたとき、ラヴェンナ近郊で血生臭い戦いがおこなわれたわけだが、その直前にこの町で、ある怪物が生まれた。それは頭に角を1本生やし、2枚の翼と猛禽類のような足を1本もち、膝の関節部には目がひとつあり、さらには雌雄両方の特徴を示しているのであった^[10]。

では、実際にその形態的意味はどのように語

られてきたのだろうか。ボエスチュオは『驚異の歴史』で、このラヴェンナの怪物について寓意的意味づけをしている。彼によれば、1本角は《誇り》と《野心》を、翼は《軽さ》と《移り気》を、腕の欠如は《善行の不足》を、膝頭についた目はこの世のものに対する《過剰な愛》を、猛禽類を思わせる鱗に覆われた足は《金貸し》と《貪欲さ》を、そして両性具有であることは《ソドムの民の罪》、すなわち《男色》をあらわしているのだという^[11]。さらに刻印について、十字印は《救済》を、Yの文字は《瀆聖》を意味し、こうした怪物の誕生が来るべき災厄の予兆を示しているとする。ここでいう災厄とは、むろんルイ12世による侵略である。

もうひとつ、ラヴェンナの怪物の寓意的解釈に関する言及を紹介しておこう。以下は、フランスの年代記編纂者ヨハネス・ムルティヴァリスJohannes Multivallis（生没年不詳）が1512年にパリで書き上げた、『カエサリアのエウセビウスによる教会史』*Eusebii Caesariensis Episcopi Chronicon*の記述である。

角は虚栄を、翼は精神の軽さと気まぐれを、腕の欠如は善行の不足を、猛禽類の足は強欲さ、高利貸しやあらゆる種類の貪欲さを、膝頭についた目は意識が世俗的な事象にしか向けられていないことを、両性具有は男色を意味する。以上の悪徳のせいでイタリアは戦争の苦しみを背負い、危機的状況に陥っている。それはフランス国王（ルイ12世）が自らの権力でもってなし得たものではなく、神の裁きによるものである^[12]。（括弧内引用者）

ラヴェンナでの怪物誕生を記述した文献はほかにもあるが、面白いのはほとんどの記述が怪物の誕生を1512年3月としているものの——ランドウッチのそれは例外的に1511年となっている——その日付となると微妙な齟齬がみられることだ。一般に支持されているのは3月6日説と3月8日説であるが、前出のヴィニユル

は1512年の初め、おそらく3月25日（受胎告知の日）から少し後ではないかと推察している^[13]。聖母の受胎日を引き合いに出す彼の記述は、イエス・キリストとラヴェンナの怪物とに何らかの関係があるのではないかと想像を逞しくさせるが、これについては後述したい。

じつのところ、ラヴェンナとは別に、フィレンツェで異形な存在が誕生したという報告がある。それもラヴェンナの怪物誕生の6年前に、である。たとえば、ヴェネツィアの貴族マリン・サヌードMarin Sanudo（1466－1536）は1506年8月の日記にその素描を貼り付けているし、ドイツでは同年に怪物誕生を知らせる木版画などが出されている。なかでも興味深いのは、ドイツの木版画の欄外における「このフィレンツェの怪物は教皇に報告され、餓死を宣告された」という記述である^[14]。また驚くべきことに、フィレンツェの怪物図は、まるで双子であるかのようにラヴェンナのそれと酷似しているのだ。

いうまでもなく、誕生年や造形的類似性のみを根拠として、ラヴェンナの怪物像の祖型を

フィレンツェのそれに求めることは早計であり、さらにそれを辿るとなると不可能に近い。だが、これまで紹介した記述をみるだけでも、当時の人々がラヴェンナの怪物をどのように解釈していたかは把握できるだろう。では、本論考はこの怪物を図像学的観点からいかに解読するのか。そろそろ核心に迫るとしよう。

3. 各部位の解読

——罪の象徴的集合体としての怪物

ラヴェンナの怪物に関する多くの図像について、ここで縷々述べることはしないが、その造形表現にはいくつかの違いがみられる。おそらく、ラヴェンナの怪物像は以下のように2つのタイプに分類することができるだろう^[15]。ここではそれをとりあえず、「タイプA」、「タイプB」とする。それぞれのタイプの特徴については、【表1】をみてもらいたい。いずれにせよ、《怪物》と呼ばれた以上、造形的観点からすれば、ラヴェンナの怪物の形態もまさにさまざまな生物のアマルガムなのである^[16]。

【表1】 2つのタイプにみられるそれぞれの特徴

	タイプA	タイプB
1 本角	あり	あり
翼	コウモリの翼	コウモリ・鳥の翼
腕の欠如	あり	あり
下半身の異形性	鱗に覆われた下半身と人間の右足と魚の尾のような左足をした2本足	鱗に覆われた下半身と猛禽類の1本足
膝頭についた目	人間の右足に	猛禽類の1本足に
両性具有	男性器／女性器	幼児的な男性器／発育途中の女性的な乳房
刻印	I（Y）、X、Vの文字	Yの文字／十字印
その他	三日月／焰（蛇）	—

【表1】から分かるように、これら2つのタイプには共通点が多い。だがその相異となると、2つの怪物像の印象をまったく変えてしまうほど決定的なものとなっている。なかでも、脚部や両性具有、そして刻印の違いは非常に興味深い。以下、確認していこう。

脚部の異形性に目を向けると、タイプAの怪物像の脚部は人間の右足と、鱗に覆われた、まるで魚の尾のような左足という2本足の形態になっている一方、タイプBのそれは、猛禽類を思わせる1本足で、下半身がやはり鱗で覆われている。両性具有である点は、タイプAがまるで屹立しているかのような男性器と、その奥に隠れた女性器といったように両性の生殖器をもつのに対し、タイプBは発育し始めたであろう女性的な乳房と、これまた発育途中と思える陰毛に覆われていない幼児的な男性器をもっている。とくに興味深いのは、怪物の体軀に刻まれた印の違いである。タイプAにはI(Y)、X、Vの3文字、タイプBにはYの文字と十字印が刻印されているのだ。

こうした造形的な相異には、はたして意味の違いもあるのだろうか。あるいは、同じ意味が込められていながら、異なる造形表現をなしているのだろうか。先に紹介したボエスチュオやマルチヴァリスによる寓意的解釈から推測すると、ラヴェンナの怪物の各部位には、《罪》の意味が付与されていると思えてならないのだ。あらためて、伝統的なイコノロジー解釈と各種のシンボル事典に拠りつつ、各部位について読み解いていこう。

角はさまざまな意味をもつ古くからの寓意的表現である。怒りもそのひとつであり、一説によれば、ここには興奮して狂暴になった牛のイメージが反映されているという。さらに、男根と不貞をあらわすこともあった。日本では嫉妬することを「角を生やす」と表現するが、同じことはヨーロッパでもみられ、寝取られ亭主¹⁷は嫉妬ゆえに額に角を生やすといわれていた。ゆえに角があらわす罪の象徴は、一般的に《憤怒》、

《嫉妬》、《淫欲》とされている^[18]。

これに対し、翼は「神の翼に守られたイスラエル」という定型的な言語表現に窺えるように、高貴や権威としての意味をもつため、それがあらわす罪は《傲慢》といわれている^[19]。

腕は力や勤勉な人間をあらわす^[20]。これが欠如していることは、《怠惰》という罪にあたるとされ、ボエスチュオやマルチヴァリスが述べた「善行の不足」という解釈は、これに依拠していると思われる。

膝は体力の主要な中心であり、人間の権威や社会支配の象徴とされる^[21]。そうした膝についている目は、権威や支配というものに拘泥していることのあらわれであるといえるだろう。よって、膝についた目が意味する罪は《傲慢》となると筆者は考える。

下半身の異形性については、タイプ別にみていく必要があるだろう。2本足であるタイプAの左足は、鱗に覆われた魚の尾のようになっていたのだが、悪い意味として用いられる魚は《食欲》や愚行の表象ともいわれている^[22]。さらにこの象徴的意味を敷衍すれば、《大食》へと拡大解釈することも可能である。一方、タイプBの怪物像は、地上の獲物に襲いかかる習性をもつ猛禽類の1本足であることから、転じてそれは《食欲》、さらに《大食》をあらわすことになるだろう。また猛禽類は、靈魂を捕食する悪魔であるとも考えられ、《傲慢》と世俗的権力の罪を負うものとされる^[23]。

両性具有は象徴的に宇宙観をあらわすものとして、よく絵画表現のテーマにされる^[24]。そのため、両性具有であることは、一般的に超越的・超自然的として解釈される場合が多いが、ときに《淫欲》の象徴的意義も帯びていたという。

一方、タイプAの怪物像のみにみられる腹部にかたどられた焰は、下方に向けられており、これは性愛的生、すなわち《淫欲》を意味すると考えられていた^[25]。腹部の焰を蛇と記述しているものもみられるが、いずれにしても蛇もまた、《淫欲》の象徴であることは周知の通りである。

【表2】 怪物像の各部位があらわす7つの大罪

7つの大罪	タイプA	タイプB
怠惰 (Accidia)	腕の欠如	腕の欠如
食欲 (Avaritia)	魚の尾のような左足	猛禽類の1本足
憤怒 (Ira)	1本角	1本角
嫉妬 (Invidia)	1本角	1本角
大食 (Gula)	魚の尾のような左足	猛禽類の1本足
淫欲 (Luxuria)	1本角／両性具有／腹部の焰 (蛇)	1本角／両性具有
傲慢 (Superbia)	翼／膝頭についた目	翼／猛禽類の1本足／膝頭についた目

以上、2つの怪物像の各部位に関する罪の意味について縷々述べてきたが、【表2】からすれば、いくつかの罪がラヴェンナの怪物のひとつの部位に複合的にあらわれていることになる。この見方を正しいとするならば、キリスト教の教義にいう《7つの大罪》がみてとれるだろう。すなわち、ラヴェンナの怪物とは、キリスト教的罪の象徴的集合体だったのではないか。

さらにラヴェンナの怪物について、次のようなことも言及することができる。かつて、20世紀最大の比較言語学者エミール・バンヴェニスト (1902-76) は、大著『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集』(1969年)において、monsterの語源であるラテン語のmonstrumが文献初出以来、一般に「正常さから逸脱したもの」、ときには「何かしら不気味なもの」「自然の摂理をおぞましく乱すもの」という意味であったことから、これを《怪物》と呼んだ。なぜこれが後世、神との関係性をもつようになったのかについて、彼はmonstrumと動詞現在形のmonstrareの関連性に着目し、その語形上の類似性からmonstrareがmonstrumの名詞派生語であるという。そして、「行動様式を教授し、従うべき方法を規定する」を指すmonstrareからmonstrumへ遡れば、後者を神々によって与え

られる「助言」や「警告」を示すものとして解釈すべきだとしている。この神は、ときに何らかの超自然的物なり生物なりを警告として発生させ、結果的に人智を混乱させる徴候や神意によって自らを顕現させる。つまり、神のみがこうした方法で警告を発することができるというのだ^[26]。

このバンヴェニストによる立論に依拠し、ラヴェンナの怪物の報告例をみれば、古来からの怪物イメージであり、その原義でもあった「前兆」や「神意」が、近世になってもなお、怪物に付与されていたのは明確である^[27]。ラヴェンナの怪物も自らの異形性によって、災厄を予兆したのであり、その限りにおいて、まさに伝統的な怪物であったといえる。だが、それだけではない。ラヴェンナの怪物が他のそれと決定的に違う点がある。この怪物を特異なものとしているのは、その出生の理由に社会的・政治的背景が、そして造形表現に暗喩的に（しかも巧みに）キリスト教教義などが複合的に付与されている点なのだ。

凶兆という伝統的な理解に加え、そこに社会的・政治的、さらに寓意的意味が混在した新たなイメージとしてのラヴェンナの怪物——。ここに近世ヨーロッパの怪物観のひとつが浮き

彫りとなるはずだ。むしろ、怪物がイメージの産物である以上、そこにさまざまな意味が付与されることは改めて指摘するまでもないだろう。しかし、ことラヴェンナの怪物についていえば、体軀に刻まれた印によって、とくにその意味が増幅されていると思える。なぜなら、ヨーロッパを鳥瞰的に眺めてみても、自らの体軀に刻印をほどこした怪物はほかにみあたらないからだ。換言すれば、ラヴェンナの怪物がもつ最大の特徴は、胸部ないし腹部に刻まれた印ということになる。では、体軀の刻印は、怪物の各部位に付与された「罪」とどのような関係にあり、それぞれがいかにかに収斂していくのだろうか。この解説こそが、ラヴェンナの怪物像の造形的意図を一気に明るみに出す重要な作業となるはずだ。

4. 刻印の解説

——イエス・キリストとしての怪物

はじめに、タイプAの怪物像にあるI、X、Vの文字についてみていこう。結論を先取りすれば、これはギリシア語で「魚」を意味するイクトウス (ICTHUS) のモノグラム (組み合わせ文字) であると考えられる。なぜならCHはXに、UはVに置き換えることができ、結果的にはIXVはICTHUSの謂いとなるからだ。また、タイプAの怪物像にはIがYとなっているものがあるが、IもまたYに互換することができたため、刻印のI、X、VとY、X、Vは同形なのである^[28]。たしかに、タイプAの造形表現をみれば、左足が鱗に覆われた、まるで魚の尾のようにになっているではないか。

周知のように、イクトウス (魚) はイエス・キリストのシンボルとされる。ICTHUSとは、ギリシア語の5つの言葉 *Íēsous Khristós Theûo Hyiðs Sotēr* 「救い主にして神の子なるイエス・キリスト」の頭文字を組み合わせたキリストのモノグラムなのである^[29]。実際、禁教時代のイエス・キリスト表現として、イクトウスの線画がカタコンベの壁面に数多く描か

れた^[30]。以上のことから、《IXV=ICTHUS=イエス・キリスト》という構図が成立することになる。IXVが刻まれたタイプAの怪物像は、まさにイエス・キリストを「怪物化」させた造形表現と思えるのだ。

さらにタイプAの怪物像で興味深いのは、3つの文字とともに印された三日月である。ヨーロッパにおいて、三日月は聖母マリアのシンボルとしても知られていた^[31]。このシンボルがあるということは、ラヴェンナの怪物が聖なる存在であったことを物語っているといえるだろう。

一方、タイプBの怪物像に刻まれたYの文字と十字印についてはどうか。まずはYの文字についてみていきたい。その手がかりのひとつとなるのが、16世紀のドイツの錬金術師であり、医師、著述家、そして作曲家という多才な顔をもつミヒャエル・マイヤー Michael Maier (1569?–1622) の著作『黄金の卓の象徴』*Symbola Aureae Mensae* (フランクフルト、1617年) に収載された興味深い図版である【図版4】。



【図版4】 男女の双頭と両性の生殖器をもった異形なる存在。右手にYの文字を掲げている。マイヤー『黄金の卓の象徴』(フランクフルト、1617年) より。部分。

それは男性と女性の2つの頭、両性の性器をもつ異形なる存在が併存しているという構図になっているのだが、なんとその右手はYの文字を掲げているのだ^[32]。

マイヤーの図版からも分かるように、じつのところ、ヨーロッパにおいてYの文字は、その形状から両性具有をあらわすものとも解釈されていた^[33]。すなわちラヴェンナの怪物像には、男女両性を兼ねそなえた身体的異形性だけでなく、体軀に刻まれたYの文字によってもまた、両性具有が意味されていると考えられるのである^[34]。

また両性具有は、原初の完全さ、完全体、コインシデンティア・オポジットム反対物の一致、無限定の状態、自律性、回復された楽園、男と女の原初的な力の再統合をあらわすものとしても認識されていたという^[35]。ここで取り上げたいのが、アイルランド生まれの神学者兼哲学者のヨハネス・スコトゥス・エリウゲナJohannes Scotus Eriugena (810?–877?)の唱える「自然区分論」である。彼によれば、実体の区分は神において始まり、漸次人間の本性にまで下降して男女の区分が生じ、ゆえに実体の再統合は、逆に人間から始めて、神を含む存在の全体へと遡行しなければならないという。さらに彼は、こうして神から自然、自然から神という円環が完成されて、世界は終末を迎え、最終段階で男女は再び統合され、両性を超越した存在である復活のキリストとなると説く^[36]。エリウゲナの論と両性具有がそなえる超越的な意味によって、Yの文字はイエス・キリストの表象へと見事に転化するはずだ。

一方、十字印については容易に解説できる。十字は「十字架にかけられた人」や「キリスト」、「救世主」、「御言葉」、「三位一体」の第2の位格(子)を象徴するが^[37]、なかでもイエス・キリストの表象として、広く人口に膾炙していた。ということは、Yの文字と十字印があらわす意味から、タイプBの怪物像もタイプAと同じく、イエス・キリストを体現していたということになるのだ。

さらにいえば、タイプBの怪物像に刻まれたYの文字と十字印は、タイプAにあるI(Y)、X、Vを互換したものといえる。IがYと表記されることは先に示したとおりだが、一方、Xが聖アンデレ十字と呼ばれ、キリスト(XPICT)を示すギリシア語の初字とされることから^[38]、タイプAの十字印もタイプBのXも同義なのである。ただ、タイプAにあるVの文字がタイプBにみられないことについては、今のところ不明とするほかはない。

以下、整理しよう。2つのタイプの像をもつラヴェンナの怪物は、その体軀に刻まれた印(文字)であるI(Y)、X、VおよびYと十字印によって、イエス・キリストを表象するという《聖なる》側面をもっていたといえる。だがその一方で、怪物の各部位には7つの大罪も読み取れることも忘れてはならない。つまり、ラヴェンナの怪物像は、聖と俗という両義性によって成立していると考えられるのだ。

5. 相反するものの一致

——二元論的イメージとしての怪物

『フリークス 秘められた自己の神話とイメージ』(1979年)の著者であるレスリー・フィードラー(1917–2003)は、ラヴェンナの怪物について、それを^{ミョ}超怪物の絵画的な神話と論じている。彼によれば、この怪物は欠如(=1本足である／腕がない)と過剰(=3つ目の目を膝頭にもつ／人間的頭部に余分な1本角がある)の存在であり、そのうえ、鳥と獣、獣と人間、男と女という複合的ハイブリッドである点で、まさに二重性を表象するものだといっているのである^[39]。

フィードラーのいう二重性は、ラヴェンナの怪物の形態的側面のみに関する仮説であり、残念ながら、その造形に込められた意味にまでは言及されていない。繰り返しを恐れずにいうならば、俗なる側面と聖なるその両方をもち合わせていたという本論の視点からすれば、ラ

ヴェンナの怪物はその含意においても、二重性というよりはまさに《二元性》を帯びた存在なのである。

その点において、アメリカの人類学者デヴィッド・D・ギルモアによる、次のような怪物への指摘は、まことに正鵠を得ているといえる。

怪物たちの力は、相反するもの同士を合体させ、さまざまな規範を覆し、認識の柵や道徳的な分別、さらに存在論的なカテゴリーをも破壊することができる。怪物はまた時間そのものの柵を凌駕する。過去と現在、悪魔的なものと神的なもの、罪と良心、捕食者と獲物、親と子ども、自己と他者とをそれぞれ結びつける怪物とは、われわれのもっとも内奥の部分に位置する自己にほかならないのである^[40]。

《他者＝怪物》という公式に基づくこれまでの研究とは違い、《自己＝怪物》とするギルモアの方向性は斬新である。しかし当然のことながら、彼の仮説をすべての怪物に当てはめることはできない。蔵持不三也がいみじくも指摘しているように、むしろ多くの問題点を孕んだままの結論といえる。怪物が語源的に神意の現れであるのは間違いないが、世界を一元的に自らのうちに収斂させる自己とは、神の存在とどう関わるのか、自己の罪意識が怪物だというのはたして何を意味しているのか、などということである。蔵持はまた、怪物に対する恐怖が罪意識と結びついていると断言するのは宗教的ないし倫理的すぎるとも批判する^[41]。しかし、ことラヴェンナの怪物に限っていえば、社会情勢の不安という恐怖を背景として、それは宗教的・倫理的意味をあらわしているのではないか。その証左となるのが、怪物像から読み取ることのできる7つの大罪という、寓意としての罪意識(の表象)なのである。

ドイツの神学者ニコラウス・クザーヌスNi-

colaus Cusanus (1400/1-64) の呈示する「相反するものの一致」の定式を敷衍したと思える、このギルモアの考えに依拠するならば、フィードラーのいう身体的特徴の二重性を挙げるまでもなく、体躯が負なる罪の集合体でありながら、イエス・キリストを表象するという正なる側面をもったラヴェンナの怪物は、まさに「相反するものが一致した」存在ともいえるのだ。

さらに次のようなことも考えられるだろう。フランス軍による侵攻および蹂躞という現実の不幸に教義的な(再)解釈をおこない、さらにそこに教義的なメタファーを付与し、これを怪物として表象する。このメトドロジーでもってあらわされたラヴェンナの怪物は、もはや怪物ではない。より正鵠を期していえば、そこには従来とはまた別の意味づけがなされているのだ。これは先に論じたとおりである。「予兆」や「凶兆」、はては「恐怖」など、語源からする怪物の伝統的な解釈ほかに、教義的な(再)解釈で意味づけされたラヴェンナの怪物は、それまでの怪物(理解)を超越した存在だったといえる。こうしてみれば、両性具有などの形態的両義性だけでなく、聖と俗という寓意的両義性も複雑に絡み合ったラヴェンナの怪物とは、すぐれて二元論的イメージなのではないだろうか。

近代哲学の一元論に重要な影響を与えたとされる前述の定式を、クザーヌスは無限者たる《神》を指すものとして打ち出した。とすれば、ラヴェンナの怪物は短絡との誹りを恐れずにいえば、神とその対極にあるはずの怪物とを同時に宿した存在とまでいえるのかもしれない。少なくとも、ラヴェンナの怪物はキリスト教的論理の「代弁者」、もしくは「使者」としての役割を担わされていたとだけはいえる。だからこそ、この怪物は7つの大罪を自らの体躯に背負わされ、神の断罪といわれたフランスによるラヴェンナ蹂躞のすぐれて表象的な寓意とされることで、神の言葉^{ロゴス}を人々に伝えたのである。まさに自己犠牲によって、神の言葉を伝えたイエス・キリストのように、である。

それにもし、ラヴェンナの怪物がたんなるはたものとして、神の罪を受けるべき存在であったのならば、なぜ時のローマ教皇ユリウス2世が、ラヴェンナの怪物がその異形ゆえに親に見捨てられ、餓死しかねないことを憂慮し、その世話を手配しただろうか^[42]。そう、教皇が不幸な境遇にあるラヴェンナの怪物を救おうとしたという記録があるのだ。真偽のほどはさておき、罪の集合体である俗なる怪物を救済しようとする、いや「できる」とするこの教皇の計らいは、先に紹介した1506年に誕生したというフィレンツェの怪物に餓死を宣告し、冷たくあしらってしまったための罪滅ぼしなのか。教皇の真意は分からない。だがそこには、怪物という想像の存在さえ、巧みに絡み取る一種のパフォーマンスが読みとれてならない。でなければ、なぜ「聖なる」教皇たる存在が、「俗なる」異形の怪物にかくも積極的に関わることがあったのだろうか。

いずれにせよ、この点において、教会堂などの怪物造形がおもに罪の可視化や形象化であったように^[43]、集合的に各部位がそれを表象するラヴェンナの怪物は、キリスト教にとって、より有用な布教・教化装置だったといえる。そこには、政治的事件の責任をひとつの怪物像に転嫁させ、プロパガンダとして利用しようとするキリスト教のしたたかささえ、窺えるのである。

おわりに ――テキストとしての怪物

ラヴェンナの怪物が、神話や民間伝承などで語られてきたそれと決定的に異なることは、もはや明確だろう。本論考が仮説として呈示した《ラヴェンナの怪物＝罪の象徴的集合体＋イエス・キリスト＝代弁者／使者》という構図からも分かるように、これは非常に稀な事例といえる。だが、これも怪物のひとつの姿なのだ。

ラヴェンナの怪物の誕生が、その後にかかる不幸の予兆と解釈されていたことはすでに述べた。ここからさらに踏み込んで考えれば、その

背景には、本来結びつきがないもの同士を関連づけ、寓意的に呈示しようとする当時の歴史認識を窺い知ることができるのではないだろうか。すなわち「歴史」を逆行し、ラヴェンナの不幸という歴史的事件の原因として、怪物誕生の逸話をもちだすという発想である。

歴史認識に怪物を用いる――。そうした筆者の理解を可能にするひとつの手がかりが、怪物の字義である。怪物という字義の成立について、再度述べることはしないが、そもそも前兆や神意といった解釈が、本来結びつくことのない因果関係を構築させて成立することは、言及するまでもない。怪物(monster)という語彙がいつ成立したのかはアポリアであり、今のところ不明とするほかはないが、もとよりそれは人智の及ばぬ、または受け入れがたい出来事を「歴史」として解釈するために生まれたのではなかったか。こうした筆者の見解を正しいとするならば、成り立ちからして、怪物は歴史認識と不可分な関係にあったと考えられるのである。

近世になってさえも、その関係は生き続けた。本論考で取り上げたラヴェンナの怪物の事例で面白いのは、そこに教義的意味づけという「新しい」手段が複雑に絡み合っていることである。より「説得性」をもってラヴェンナ侵略という悲劇の歴史を受け入れ、理解するために怪物を用いるには、教義的な意味づけが必要だったのかしれない。むろん、そのためには怪物の細部に神の言葉を宿すことが前提とされたはずである。

以上のように、最初に触れたヴァールブルクの箴言に倣って、怪物の細部を読み解いていけば、われわれはそこに怪物の多義性、換言すれば、怪物が発する多くのメッセージをあぶり出すことができる。その意味において、怪物とは開かれた《テキスト》として存在するといえるのである。

註

[1]ビザンティン文化のもと発したといわれる

- モザイク装飾は、ラヴェンナに始まり、ローマ、シチリアなどへその影響が伝播していく。ほかにも、サンタ・ボッリナーレ・ヌオーヴォ教会（6世紀）や聖ヴィターレ教会（6世紀半）などがモザイク装飾で有名である。なお、ラヴェンナはダンテがフィレンツェを追われた際落ち着いた町で、ここで『神曲』が書き上げられた。彼はこの町のモザイクを称して、「色彩のシンフォニー」と絶賛したという。
- [2] ジュリアーノ・プロカッチ『イタリア人民の歴史Ⅰ』、斎藤泰弘／豊下植彦訳、未来社、1984年、184頁。【PROCACCI, Giuliano : *Storia degli Italiani*, 2voll., Laterza, Bari, 1968.】
- [3] フランス軍は、重装歩兵1900、軽騎兵3000、^{ラントツイクネツキ}ドイツ傭兵5000を含む歩兵1万8000の計2万3000の大軍に、50門の最新式の大砲を備えていた。対する同盟軍は、重装騎兵1700、軽騎兵1500、歩兵1万3000の計1万6000で、大砲は24門だった。いかに大規模な戦いであったかが、ここからも窺える。塩野七生『神の代理人』、中公文庫、1996年、403頁。
- [4] フランチェスコ・グイッチアルディーニ『イタリア史Ⅴ 第10・11巻』、末吉孝州訳、太陽出版、2003年、146頁。【GUICCIARDINI, Francesco : *Storia d'Italia*, a cura di Costantino Panigada, G. Laterza, Bari, 1967.】
- [5] LANDUCCI, Luca : *A Florentine Diary from 1450 to 1516*, Continued by an Anonymous Writer till 1542 with Notes by Iodoco Del Badia, Arno Press, New York, 1969, pp.249-250.
- [6] 伊藤進『怪物のルネサンス』、河出書房新社、1998年、291-292頁。
- [7] 同書、293頁。
- [8] ROSE, Carol : *Giants, Monsters, and Dragons, an Encyclopedia of Folklore, Legend, and Myth*, Abc-Clio, California,

2000, p.307.

- [9] 彼の本名はコンラート・ヴォルフハルト Conrad Wolffhartである。一般に知られているリュコステネスとは、ヴォルフハルトのギリシア風の名前であるという。
- [10] PARÉ, Ambroise : *Des Monstres et Prodiges*, Édition Critique et Commentée par Jean Céard, Librairie Dorz S. A., Geneva (Switzerland), 1971. pp.7-8. なお、同書内のジャン・クロードによる註釈(pp.153-155)も参考のこと。
- [11] レスリー・フィードラー『フリークス 秘められた自己の神話とイメージ』、伊藤俊治ほか訳、青土社、1999年、22-23頁。【FIEDLER, Leslie : *Freaks ; Myths and Images of the Secret Self*, Simon & Schuster, New York, 1978.】
- [12] DASTON, Lorraine and PARK, Katharine : *Wonders and the Order of Nature ; 1150-1750*, Zone Books, New York, 1998, p.182.
- [13] 伊藤、前掲、291頁。
- [14] DASTON and PARK, op.cit., p.178.
- [15] イタリアの医師兼博物学者として知られるウリッセ・アルドロヴァンディ Ulisse Aldrovandi (1522-1605) の『怪物誌』 *Monstrorum Historia* (ボローニャ、1599-1644年) や、先のリュコステネスによる『奇異ならびに前兆の年代記』には、タイプAおよびBの異なるラヴェンナの怪物図がともに収載されている。このことから、ヨーロッパで2つのラヴェンナの怪物像が認知されていたことは、想像に難くない。ALDOROVANDI, Ulyssie : *Monstrorum Historia*, J. B. Ferronius, Bologna, 1648, pp.369-370 および LYCOSTHENES, Conrad : *Prodigiorum ac Ostentorum Chronicon*, H.Petri, Basel, 1557.
- [16] そのほかの怪物像の形態上における特質や意味づけについては、近々上梓される拙著

- 『怪物の文化誌』(仮題)、蔵持不三也監修・序文、原書房を参照されたい。
- [17] コキュについては、蔵持『シャリヴァリ民衆文化の修辭学』、同文館、1991年などを参照されたい。
- [18] ちなみに一角獣^{ユニコーン}は、『憤怒』をあらわす象徴として、キリスト教の図像表現にしばしば登場することで有名である。これは一角獣が一見美しい姿をしていながら、非常に荒々しい性格をしていると考えられていたことに起因する。一角獣に関する主な研究書としては、リュディガー・ロベルト・ベア『一角獣』、和泉雅人訳、河出書房新社、1996年【BEER, Rüdiger Robert: *Einhorn; Fabelwelt und Wirklichkeit*, Verlag Georg D. W. Callwey, München, 1972】およびHATHAWAY, Nancy: *The Unicorn*, Avenel Books, New York, 1984 (1980) などがある。
- [19] ハンス・ビーダーマン『図説世界シンボル事典』、藤代浩一監訳、宮本絢子ほか訳、八坂書房、2000年、264頁。【BIEDERMANN, Hans: *Knaurs Lexikon der Symbole*, Dromersche Verlangsanstalt Th. Knaur Nachf., München, 1989.】
- [20] アト・ド・フリース『イメーシ・シンボル事典』、山下主一郎主幹、荒このみほか訳、大修館書店、1984年、29頁。【VRIES, Ad de: *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam・London, 1974.】
- [21] ジャン・シャヴァリエ／アラン・ゲールブラン『世界シンボル大事典』、金光仁三郎ほか訳、大修館書店、1996年、819頁。【CHEVALIER, Jean et GHEERBRANT, Alain: *Dictionnaire des Symboles*, Editions Robert Laffont S.A. et Editions Jupiter, Paris, 1982.】
- [22] フリース、前掲、247頁。
- [23] 柳宗玄／中森義宗編『キリスト教美術図典』、吉川弘文堂、1990年、375頁。
- [24] BESSY, Maurice: *A Pictorial History of Magic and the Supernatural*, Spring Books, London・New York・Sydney・Toronto, 1964, p. 124. ベッシーによれば、両性具有は発展周期(循環)における始まりと完成のシンボルとしても、絵画表現のテーマとなったという。また錬金術では、物質要素の分解と融合を意味する。
- [25] フリース、前掲、244頁。
- [26] エミール・バンヴェニスト『インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集II 王権・法・宗教』、前田耕作監修、安永寿延解説、蔵持不三也ほか訳、言叢社、1987年、247-255頁。
- 【BENVENISTE, Émile: *Le Vocabulaire des Institutions Indo-Européennes*, 2. *Pouvoir, Droit, Religion*, Eds. de minuit, Paris, 1969.】monstrumには数々の類似語がある。たとえば、miraculum, omen, ostentum, portentum, prodigiumである。これらはいずれも「神意」や「前兆」、「奇跡」、「予兆」としての意味をもつ。バンヴェニストによれば、omenは「真実なる予言」、ostentumは「観察者 observateurの眼前で(obs-)その視界に広がる(ten-)現象」、protentumは「視線に差し出された(por-)未来を明かす広い展望」、prodigiumは「神威(aio)を帯びて、予言として公に語られる(prod-)言辞」であるという。なおギリシア語にはこの6つの言語に対応するものとしては、térasしかない。
- [27] ヨーロッパにおける怪物イメージは多様である。たとえば、ドイツの人文学者ハルトマン・シェーデル(1440-1514)による『世界年代記』(ニュルンベルク、1493年)の「未開」世界の地図が描かれた頁には、その欄外に奇怪な姿をした数多くの怪物人種の図版が挿入されているが、まさにこれは、当時ヨーロッパの外なる(＝「未開」)世界に怪物人種が存在していると考えられていたことを物語っている。すなわち、怪物は「未開」の表

- 象でもあったのだ。図版については、SCHEDEL, Hartmann: *Liber Chronicarum* (German), Kölbl, München, 1965, Blat. 12-13 [Facsim. of *Liber Chronicarum*, Koberger, Nuremberg, 1493]を参照のこと。また、かつて筆者は「未開」概念の表象としての怪物について論じたことがある。詳細は拙稿「異形論 ～近世ヨーロッパの博物誌における「未開」概念の表象～」、『人間科学研究』、第16巻、第1号、早稲田大学人間科学部、2003年、35-47頁をみてもらいたい。
- [28] 15～17世紀まで、ヨーロッパでは、Vの字はUの字と同じであった。なお、U、VはF、W、B、Mと互換することもできた。
- [29] ニコル・ルメートル／マリー＝テレーズ・カンソン／ヴェロニク・ソ 『図説キリスト教文化事典』、蔵持不三也訳、原書房、1998年、16頁。[LEMAÎTRE, Nicole et QUINSON, Marie-Thérèse et SOT, Véronique: *Dictionnaire Culturel du Christianisme*, Editions NATHAN, Paris, 1992.]
- [30] ジェニファー・スピーク 『キリスト教美術シンボル事典』、中山理訳、大修館書店、1997年、91頁。[SPEAKE, Jennifer: *The Dent Dictionary of Symbols in Christian Art*, Trafalgar Square Books, Vermont, 1994.]
- [31] COOPER, J. C. : *An Illustrated Encyclopedia of Traditional Symbols, with 210 Illustrations*, Thames and Hudson, London, 1978, p.44.
- [32] MASSON, Hervén: *Dictionnaire Initiatique*, Jean-Cyrille Godefroy, Paris, 1995, pp.31-33. マッソンによれば、この図版は2人の夫婦の不可欠な結合をあらわしているという。なお、錬金術ではYは塩の象徴ともされる。
- [33] VRIES, Ad de: *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing Company, Amsterdam・London, 1974, p.512. Yに込められた象徴的意味はほかにもある。たとえば、ピタゴラスはその形状から、Yはモナドmonadと、それから発するドウアドduad (2個1組) によって形成される「聖なる3つ組」sacred triadをあらわし、人生を象徴するという。すなわち、モナドは幼児の無垢、ドウアドは成人になってからの美德と悪徳を意味する。
- [34] ラヴェンナの怪物のほかにも、両性具有を特徴とする怪物が知られている。それはアンドロギュノス (Androgyne) と呼ばれ、「未開」世界に棲むといわれた。古くは、ローマの自然科学的著述家であった大プリニウス Caius Plinius Secundus (23-79) の『博物誌』*Naturalis Historia* (77年)、また中世のベストセラーといわれる、ジョン・マンデヴィル卿 Sir John Mandeville (?-1371) の『東方旅行記』*Sir John Mandeville's Travels* (リエージュ、1362年?) などにその記述がみられる。KAPPLER, Claude: *Monstres, Démons et Merveilles à la Fin du Moyen Age*, Éditions Payot, Paris, 1980, pp.144-145. 以下は『東方旅行記』における記述である。「男と女がいっしょになった人間の住んでいる島もあって、彼らは男女の性器をふたつながら備え、めいめいが片側にひとつだけ乳房をもっている。そして、男の性器を用いると、子供をはらませ、女の性器を用いると、妊娠する」(マンデヴィル『東方旅行記』、馬場正史訳、東洋文庫19、1964年、168頁)。そのほか、プリニウス『プリニウスの博物誌 I』、中野定雄／中野里美／中野美代訳、雄山閣出版、1986年、299頁などを参照にされたい。
- [35] COOPER, op.cit., p.12.
- [36] 『世界宗教大辞典』、山折哲雄監修、平凡社、1991年、2044頁。
- [37] シャヴァリエ、前掲、485頁。十字架はイエス・キリストの象徴以上のもので、キリストの人間としての一生、さらにキリストその

ものと同一化する。

[38] VRIES, op.cit., p.511.

[39] フィードラー、前掲、23頁。

[40] GILMORE, David D. : *Monsters ; Evil Beings, Mythical Beasts, and All Manner of Imaginary Terrors*, Univ. of Pennsylvania Press, Philadelphia, 2003, p.194.

[41] 詳細については、拙著『怪物の文化誌』（前掲）に所収される蔵持の序文「中世怪物表象考 — 『怪物の文化誌』によせて —」を参照されたい。

[42] 伊藤、前掲、297頁。

[43] 詳細については、蔵持『異貌の中世 — ヨーロッパの聖と俗 —』、弘文堂、1986年などを参照されたい。

図版出典

【図版1】伊藤、前掲、295頁。

【図版2】PARÉ, op.cit., p.154.

【図版3】Ibid., p.153.

【図版4】MASSON, op.cit., p.32.

[2004年5月26日受理]

Iconology of a Monster

—Imagery of the Monster of Ravenna, Italy—

Toshihisa Matsudaira*

Abstract

This article is an iconological study concerning the imaginary figure of the monster of Ravenna, Italy. This monster, which is said to have come into being in March, 1512, was on everybody's lips as an omen of the French invasion of Ravenna, which happened a month later. As evidence, there remain a large number of historical materials and illustrations describing this monster. The images are extremely bizarre, showing characteristics of androgyny, full wings instead of arms, eyes on its patellas, and so on. The most remarkable characteristic of all could be considered the carved seals engraved on the chest or abdomen.

The aims of this study are to disclose how the monster was described by scrutinizing the historical materials and also to clarify any meaning attributed to them through iconological analyses.

As etymology suggests, monsters have been interpreted as a sign of an omen or Providence from ancient times. In this sense only, the monster of Ravenna certainly stems from local tradition. However, my iconological analyses made it clear that there are also extremely unusual characteristics involved, as outlined below.

There are two design types upon which the monster in Ravenna could be based. Careful scrutiny of both reveals the hidden symbolic meaning of the Christian doctrine of "the seven deadly sins." The carved seal, which is the most outstanding trait of all, means "Jesus Christ." That is to say the monster of Ravenna, which is an aggregation of sins, represents none other than Jesus Christ.

In other words, while the monster of Ravenna is understood traditionally as an ill omen, its images are, on the other hand, formed with ambivalent meanings both sacred and secular. This is a fine illustration of dualism, or "the accordance of two mutually contradictory ideas."

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University